



開校以来の甲子園初出場！ ～佐賀県立有田工業高等学校の歴史～



明治44年3月 有田工業学校野球部（梶原家提供）

今年の夏は気温と同じく熱く盛り上がった有田でした。それも、有田工業高校ナインによる甲子園初出場という若者の快挙があつてのことでした。

甲子園での開会式直後、抽選で第一試合を引き当て、対戦相手は岐阜県大垣日大高校。試合結果はすでにご存じの通り、これまた佐賀大会同様、劇的な逆転で初勝利をおさめました。

地域では「アリコー」と呼んで親しまれている佐賀県立有田工業高等学校ですが、その歴史は古く、明治33年(1900)、県立佐賀工業学校の分校として発足後、同35年5月23日泉山に新校舎が完成し、翌年に佐賀県立有田工業学校が誕生しました。現在、学校跡地は泉山体育館となっていますが、佐賀出身の経済学者で歌人でもあった高田保馬氏が作詞した「朝風清き泉山」という出だしから始まる校歌に、その歴史の始まりを知る事ができます。

明治37年第1回陶業科卒業の江副孫右衛門を紹介した「江副孫右衛門～近代陶業史上の一人間像」(小出種彦著)には県立伊万里商業学校と対抗試合した時のことを次のように紹介しています。

「相手はまがりなりにも都会の学校でユニホームを揃えていた。孫右衛門をピッチャーに押し立てる有工チームは仇討ちの助太刀よろしく、たすきを十字に綾どり、袴をたくしあげ、裸足でグラウンドに乗り込む有様だった。これでは、いかに野球を知らない見物の眼にも、羽織袴の必負はレキ然とうつつた。ところが、イザ試合を始めてみると、着馴れないユニホーム姿がしばしば球をミスするのに反して、体当たりの袴組

はヒダをひろげて球を押さえこむ奮闘ぶりで、相手を幻惑した。」

結果は今の有工ナインが佐賀県予選決勝戦で成し遂げた逆転勝利と同じ奇跡的な勝利だったそうですが、これが、後に東洋陶器(現TOTO)や日本碍子などの社長を歴任し、陶業近代化のリーダーと称された孫右衛門が有工時代を回想する時に、必ず口にしていたエピソードの一つだったそうです。おさな友達に「マゴエンシャン」と呼ばれていた孫右衛門の生家は上幸平の窯焼きで、現在は「小路庵」としておなじみです。

父江副八蔵は、楽ではない暮らしの中から息子を有工製陶科から東京工業学校へ進学させました。

明治36年に分校から佐賀県立有田工業学校として独立したころの定員は100名。第1回生の孫右衛門が在籍していた当時、本科は図案・陶画・模型・陶業・製品の各科に分かれ、製品科の3年制を除いて他は4年制、これとは別に年限2年の別科がありました。マゴエンシャンが卒業した明治37年の卒業生は12人。ちなみに第2回8名、第3回9名、第4回8名と、まだ焼き物屋に学問などいないという時代でもあり、いかに選ばれた者であったかということでもあります。

数多くの卒業生は今も町内外のさまざまな分野で活躍中です。今回の甲子園出場はそのOBが応援に駆け付け、再会を果たした場でもあったということですが、残念ながら2回戦敗退という結果であっても、有田の町がこれほど一つの心になったのは若人の力でした。

(尾崎 葉子)



有田工業高校に関しては「有工百年史」が、江副孫右衛門に関しては本文中の書籍の他に、当館で編集発行した「有田皿山遠景」、「おんなの 有田皿山さんぽ史」などにあります。

皿山

季刊

No.99

秋

2013

有田町歴史民俗資料館・館報

平成 25 年度企画展

アジアが初めて出会った有田焼

— 蒲生コレクションを中心に —

会期：平成 25 年 10 月 1 日（火）～ 11 月 30 日（土）

期間中無休・入館料無料

はじめに

当館の今年度の企画展は、有田焼の海外輸出をテーマにしています。館報 No.96 でご紹介しました「蒲生コレクション」を中心に来月から展示を行う予定です。蒲生コレクションは、東京在住の蒲生慎一郎さんが収集されたものです。蒲生さんは学生時代に有田町内の天狗谷窯跡の発掘調査にも参加された方で、調査を指揮された故三上次男博士とともに世界を旅して、これまで各地に残る有田焼を収集されてきました。そして、それらの内、カンボジアやインドネシアで収集されたものを昨年度と今年度にわたり、有田町に寄贈していただき、今回のお披露目となりました。

今回はこの蒲生コレクションを中心に、フィリピンから出土した有田焼、当時の海外輸出港であった長崎から出土した有田焼、長崎からアジアへ運ぶ途中に沈んだと思われる海岸採集資料を集めて紹介し、最近の研究成果を織り交ぜながらアジアへ渡った有田焼の軌跡をたどってみたいと思います。

大航海時代の陶磁器貿易

中世以来、海の道は陶磁の道でした。東アジアの中国で生産された磁器は、インド洋を経て、西アジアやアフリカまで船で運ばれていました。東西交易路としては陸のシルクロードがよく知られていますが、陶磁器のように重くてかさばるものを大量に遠くへ運ぶためには船が適していました。東西間の物流の大動脈は海にあり、有田焼もこの大動脈によって運ばれていったのです。

そこでまず企画展の導入として、大航海時代末期、有田焼の海外輸出が始まる前にアジアに流通していた陶磁器の展示を行います。フィリピンのセブ島で出土している中国磁器、伝カンボジア出土の中国磁器など 16～17 世紀前半にかけての製品を紹介します。

海禁令と有田焼の海外輸出

有田焼の海外輸出の記録上の初見は、正保 4 年（1647）に長崎を出帆し、シャム（現在のタイ）を経由してカンボジアに向かう一艘の唐船が積んでいた「粗製の磁器 174 俵」です。有田焼の創業からわずか 30 年ほどでアジアは有田焼と出会うこととなります。この有田焼の海外輸出の始まりは、当時の東アジア情勢が大きく関わっています。最大の陶磁器輸出国であった中国は 17 世紀中頃に大きな混乱期を迎えます。明から清へと王朝が交替する混乱の中、有田焼は海外へと運ばれていきました。

さらにその混乱は続き、新しい清王朝は海禁政策、すなわち海上貿易を禁止する政策をとります。その結果、中国磁器の海外輸出が激減し、その代わりに有田焼が海外市場に広く輸出されることとなりました。展示では、海外輸出が本格化した頃の様子を当時の海外輸出港であった長崎の出土遺物と、東南アジアに運ぶ途上で沈んだ陶磁器から見ていこうと思います。

アジアが出会った有田焼

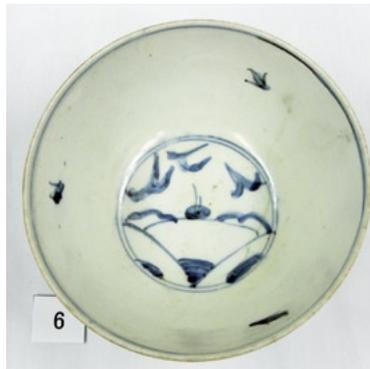


写真 1 伝カンボジア出土染付碗（蒲生コレクション）

続いてカンボジア、インドネシア、フィリピンなど東南アジアに渡った有田焼の展示を行います。一口に東南アジアと言ってもその風土や文化は国や地域によってそれぞれ異なっています。そのため、使う器もさまざまです。東南アジアに渡った有田焼の器を通して、地域の食文化の違い

を知ってほしいと思います。

カンボジアでは、大碗や鉢が大半を占めています(写真1)。この傾向は同じインドシナ半島のタイでも同じです。おそらく汁物を入れるためのものでしょう。これらは17世紀前半に流通していた中国磁器をモデルに有田をはじめ波佐見や三川内、嬉野、武雄など肥前一帯で生産されたものです。

インドネシアでは、中皿、大皿が主体です(写真2)。



写真2 インドネシア伝世染付皿(蒲生コレクション)

大皿を囲んで手づかみで食事をする食文化が反映されているのでしょうか。またインドネシアにはオランダ連合東インド会社(VOC)の拠点であるバタビアがありましたから、オランダ船も数多く有田焼を運んでいます。インドネシアで発見される皿の中にはオランダ船によってヨーロッパに運ば

れる予定だったものも含まれているかもしれません。

フィリピンは、当時スペインの植民地でしたが、異なる文化や社会が混在していました。今回の企画展ではフィリピンのセブ島の遺跡から出土した有田焼を展示します。一つはセブシティの独立広場から出土したもの、もう一つはパリアン地区(イエズス会旧宅跡)から出土したものです(写真3)。

その他、今回は写真だけの展示となりますが、セブ島の南東部のボルホーンという小さな村の墓地から出土した有田焼なども紹介します(写真4・5)。



写真3 セブシティ・イエズス会旧宅跡出土の有田焼(courtesy: Jimmy and Tony)

展海令前後の長崎

17世紀末には中国が展海令を公布して海禁政策を撤廃し、磁器の再輸出を本格化します。清朝の中国船

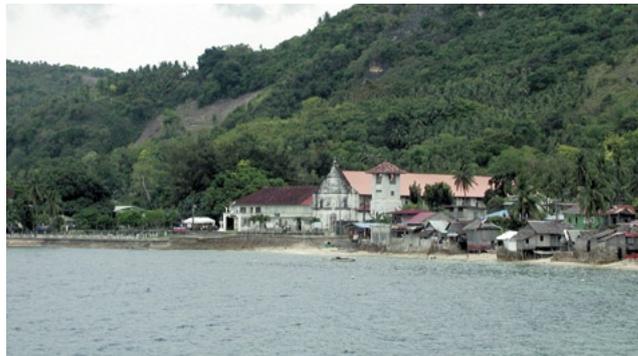


写真4 セブ島ボルホーン遺跡遠望



写真5 セブ島ボルホーン遺跡出土状況

が堰を切ったように来航した長崎にも中国磁器が大量に持ち込まれています。長崎の中国人を居住させるために元禄2年(1689)に築かれた「唐人屋敷」の造成土の下から、展海令前後の中国磁器が有田焼などとともに大量に発見されています。

中国磁器の再輸出が本格化した後、多くのアジア市場は中国磁器に奪還されてしまいますが、オランダの拠点があったインドネシアにはオランダ船による有田焼の輸出が続きます。蒲生コレクションのインドネシア伝世品の中にも17世紀末～18世紀前半の有田焼が数多く見られます。

おわりに

アジアに運ばれた有田焼の旅はそこだけでは終わりませんでした。バタビアに運ばれた有田焼はオランダ船によってヨーロッパに運ばれましたし、フィリピンのマニラに運ばれた有田焼はさらにスペイン船に載せられて、太平洋を渡っていきました。また、エジプトのカイロ付近の遺跡や東アフリカの沿岸部で発見されている有田焼も、東南アジアに輸出されたものがイスラム商人やインド商人によって運ばれたものと思われる。

17世紀中頃、アジアが初めて出会った有田焼は、その後、世界を巡りました。それは世界各地それぞれの需要に応えたものでした。世界市場を相手にした工業製品の先駆けと言えるものでした。(野上 建紀)

歴史の川ざらい～ベンジャラを探そう!! 開催しました

昨年第一弾を実施し好評を得た「歴史の川ざらい」を、今年も8月3日(土)に開催しました。これは、子ども達に川底に眠る古い陶片を探してもらうことによって、郷土・有田の歩んできた歴史の一端に触れてもらおうというもので、かつて川の周辺の丘陵に多くの盛り窯が築かれ磁器が焼かれていた、有田ならではの企画です。

今年は、秋に当館において「アジアが初めて出会った有田焼」展を開催することにちなんで、その展示品と同じような輸出用の有田焼を探してみようということで行いました。

親子で川の中に散らばる陶片を次々と集めて行くのですが、やはり鑑定してもらえると、江戸時代の古いものは、ごく少量になってしまいます。それでも、今回も参加した子ども達がすべて江戸時代の陶片を探すことができ、海外輸出用の製品を見つけた子どもも何人もいました。

ちなみに、今回最古の陶片は、1640年代の染付皿で、有田が世界へと羽ばたく直前の製品でした。



陶片を探している子ども達

キミも考古学の博士になろう!! ～山辺田遺跡発掘体験～

8月8日(木)に、有田町でははじめての試みである、子ども達による遺跡の発掘調査体験を行いました。当日は、ちょうど有田工業高校野球部の甲子園での試合と重なったためか、欠席者もちらほらありましたが、参加した子ども達はもちろん、それ以上に(?)保護者の方々が貴重な体験を楽しまれたようでした。

発掘した山辺田(やんべた)遺跡は、隣接する国指定史跡山辺田窯跡などに関わった人達が、製作工房を構えていた場所です。17世紀の初頭から約1世紀の間工房が継続していましたが、その間、1640～50年代頃には、日本で最初期の色絵磁器が生産されています。体験では、土の中にその頃の染付製品などがびっしりと詰まった状態で発見され、中には色絵磁器を掘り出した子どももいました。猛暑の中での、午前中の短い時間の体験でしたが、まだ土の中で頭をのぞかせる陶片の数々に、皆さん名残惜しそうな様子でした。



説明を受け、遺物を慎重に掘り出している様子

第13回 町屋模型作り教室 開催しました

8月19日(月)、20日(火)の2日間にわたって、第13回 町屋模型作り教室を開催しました。参加者は町内小学校の5・6年生10名。今年は内山地区にある伝統的建造物群の建物を実際に見て、それから模型製作に取りかかろうということで、場所を有田町役場東出張所の2階に移して行いました。



インターンシップの有工生が先生に

例年、講師は職員が担当するのですが、今年は『れきみん応援団』のみなさん、2日目からはインターンシップの有田工業高等学校2年生の山領誠也さんと堀江美沙さんにもご協力いただきました。驚くことに、堀江さんは小学生のとき、第7回の模型教室に参加した経験があるとのこと。今度は教える立場になって、カッターの使い方や庭・樹木の作り方を子ども達に指導してもらいました。

子ども達は思い思いの町屋を作り、それぞれ特徴のある町並みを完成させました。

季刊『皿山』

通巻99号(平成25年9月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185
URL: <http://rekishi.town.arita.saga.jp>